

< テーマ > 一貫した支援システム～後期中等教育に視点を当てて～

「重点推進研究 障害のある子どもへの一貫した支援システムに関する研究 - 後期中等教育における発達障害への支援を中心として - 」

< シンポジスト >

高田孝治（東京都立世田谷泉高等学校 教諭）

高井麗子（福島県立川俣高等学校 教諭）

茂木純子（宮城県立養護学校岩沼高等学園 教諭）

< コメンテーター >

佐藤紘昭（弘前大学教育学部付属教員養成学研究開発センター 教授）

< 司会 >

藤井茂樹（国立特別支援教育総合研究所 教育相談部）

第 1 分科会では、司会の藤井より「障害のある子どもへの一貫した支援システムに関する研究として、特に後期中等教育における発達障害の生徒への対応について」を検討するという本分科会の趣旨が説明された後、定時制高等学校、通常の高等学校、高等養護学校の各教員であるシンポジスト 3 名から話題提供があった。

高田先生からは、チャレンジスクールとしての学校の取組（三部制、入試方法、不登校生徒への対応）や、特に対象となる生徒の実態把握の方法、支援方法、中学校との連携等について各事例を通して説明があった。

高井先生からは、平成 19 年度までの文部科学省の研究開発学校の取組としながらも、通常高校での発達障害を含めた支援が必要な生徒の実態把握の在り方、校内支援体制の整備、支援対象生徒の具体的な支援内容及び支援方法、さらに今後の課題について説明があった。

茂木先生からは、高等部のみ知的障害特別支援学校の取組として、目指す生徒像を明確にしながら育てたい 3 つの力について説明があり、その中でも、個別の教育支援計画を中核としながら、就労や離職状況への対応について報告があった。

次いで 3 人のシンポジストの話題提供後、コメンテーターの佐藤先生からは、「行政、学校、高等学校の関係者には、どこから切り込めるか 3 人の話題を再度考えてほしい。」「高等学校の新学習指導要領の配慮事項に、特別支援教育が盛り込まれたことは画期的なこと。」「不登校生徒がいるという前提で、高等学校は取り組まないといけない。泉高校の取組は定時制、チャレンジだからできるということではない。入口のハードルを低くする取組は参考になる。」「川俣高校は自立活動を教育課程に位置付けている。リソースルームによる個別指導において、SST の導入は他の高校においても必要なこと。高校においても通級による指導を導入すべきと主張してきている。」「現場レベルの実践が制度を改革していく。」「センター的機能を高等学校にも導入し、充実させる必要がある。その際、高校に主体性をもたせた方法を。様々な生徒への対応は学校の教育力の向上につながる。」といった趣旨のコメントがなされた。

（以上、要項 p15～ p22 参照）

< 参加者との質疑応答 >

質問者：「高校で通級による指導を受ける際、出席はどうなっているか？」

高井先生：「基本的には放課後に実施している。相談の中で実施している時間も単位に入れることもある。」

質問者：「定期考査の問題、大学進学における評価の問題、評定の付け方についてアドバイスを」

高田先生：「成績評価は普段の授業、提出物等を総合的にみて評定を出している。」

高井先生：「評価は他の生徒と同様に評定している。発達障害と思われる生徒が自力で大学を受験しているケースも多くみられる。」

質問者：「実態把握の件で、全員に毎年心理検査を実施しているのか？その分析や活用方法は？」

高井先生：「従前から実施している。データは生徒返却用のものを担任が面接する際に使用。それ以外は教育相談部で管理している。また大まかな概要については高井がまとめて校内研修会で報告。特に不応適生徒の情報、知的発達に関しては5段階レベルで提示し、全職員で共有している。」

質問者：「入学選考が選抜であるが、出席回数が高い生徒は不合格になるのか？選抜の条件を教えてください」

高田先生：「選考基準は作文、面接、志願選考書を総合的に検討している。中学時代の情報は必要としていない。退学する生徒は、サポート校への転学とか就労のケースである。」

茂木先生：「不登校生徒が入学してくるケースもある。高校に入ってから不登校になる生徒は、自分が描いたイメージとは異なることに気づき辞めていくケースが多い。」

質問者：「生徒の進路、就労に関して職業安定所や企業、地域のセンター等と連携しているか？」

高井先生：「1年生全員にインターシップを実施している。その際全職員で分担し、インターシップを受け入れてくれる地元企業50社を回り、連携を取っている。就労担当の職員はそれ以外でも地域の企業に出向き連携をとっている。また、進路指導担当者は発達障害者支援センター等との会合もあり、その情報をコーディネーターの高井に提供してくれている。」

質問者：「個別の指導計画を作成する際、どのくらいの時間を要しているのか？計画の変更に関しては？」

高井先生：「高井が作成して教科担任等の関係者に加筆してもらっている。6月頃を目途に作成。修正は大幅にはないが、必要に応じ見直し修正を行っている。」